教育と文化
No.119
平成31年３月１日
公益財団法人
愛知教育文化振興会
岡崎市明大寺町字馬場東170番地1
電話 0564－51－4819

子どもが背負うランドセル

西三河教育事務所長　原田憲一

平成最後の大晦日、朝刊には、「東京・品川―名古屋間を最短40分で結ぶリニア中央新幹線」「気軽に空を移動できる次世代の交通手段・空飛ぶ車」に関する記事が掲載されていました。夢のような話ですが、10年後には、それが当たり前の世界になるようです。

一方、初詣などに欠かせない「さい銭」にまで「電子マネー」が広がっているという記事も気になりました。確かに便利かもしれませんが、果たしてそれでよいのか、これも、当たり前の世界になってしまうのでしょうか…。

あと2か月で「平成」時代も幕を閉じます。時代とともに、子どもを取り巻く環境や教育内容、制度なども大きく変化してきましたが、新時代の学校、教育はどうなっていくのでしょうか。先行き不透明で想像することすら困難です。そんな今だからこそ、時代を超えて大切にすべきことを見つめ直し、再認識する必要があると思います。

新年度を迎える準備が始まるこの時期になると、小学校への入学を楽しみに、ピカピカのランドセルを背負う練習をしたり、近くに置いて寝たりする子どもたちの様子が目に浮かびます。そして、4月になると、まるでランドセルが歩いているかのように登下校している新1年生の姿に微笑ましさを覚えます。

このランドセル、私が小学生の頃はもちろん、新任教師として小学校に勤務していたときも、男子は黒色、女子は赤色が当たり前でした。しかし、今は当時と全く違います。水色やピンク、茶色など、カラフルで、デザインや機能もさまざまです。まさに、個性を大切にする時代の象徴であるような気がします。そして、その個性的なランドセルを開けてみると、中には、もっと個性的で「大切なもの」が詰まっています。

ある講演会で、「登校する子どもたちのランドセルには家庭の雰囲気が詰まっている。下校する子どもたちのランドセルには学校の雰囲気が詰まっている」という話を聞き、納得した覚えがあります。この雰囲気こそが、「大切なもの」であると思います。

家庭から学校へ運ばれる大切なもの、それは、子どもの夢や希望、わが子にかける保護者の願い、学校や担任へ寄せる期待や不安であり、時には不満や怒り、そして、喜びや悲しみなど、その時々の感情もあるでしょう。だからこそ、教師は敏感に丸ごと受け止め、それらを膨らませたり取り除いたりして、再びランドセルに詰めて返さなければいけないと思います。そして、その詰めて返すべき大切なもの、学校から家庭へ運ばれる大切なものは、この子にかける教師の願いであり、この子の成長にほかなりません。

こんなことを言っている私自身、担任していた子どもたちのランドセルの中身「大切なもの」を敏感に丸ごと受け止めることができていたのか、子どもの成長として返すことができていたのか、今、改めて反省させられます。

子どもが背負うランドセルは時代の変化とともに変わりますが、そこに詰められた中身は、いつの時代も変わりません。そして、その中身を大切にし、家庭と学校の信頼関係を築いていくなかで子どもを支え、育てる…、時代が変わっても変えてはいけないことのひとつであると思っています。

もくじ

巻頭言
子どもが背負うランドセル　原田　憲一
三河教育への提言
三河教育の源流へ　尾崎　智
随想　時を守り　場を清め　礼を正す　浅井　英雄
三河の文化を訪ねて
和紙工芸と四季桜の美が織り成す小原の里　西﨑　修
ネイチャーウォッチング　参加者の声
教室の窓辺　伊藤健太郎・横田美津子
平成30年度絵画コンクール
平成30年度かきぞめコンクール
平成30年度個人研究助成
～審査を終えて～
平成30年度教育図書出版助成
郡市の特色ある取り組み　碧南・新城
学校教育ボランティアグループ活動紹介
行事予定・編集後記

三河教育への提言

三河教育の源流へ

―義務教育学校設立に向け―

西尾市教育委員会教育長　尾崎　智

『海べの　小さな学校
潮風と波と光がある
明るい心の子らが
力いっぱい伸びている』

これは、へき地教師の歌「太陽となろう」の二番の歌詞の一節です。私が教師になった頃はもちろん、平成初期までは、毎年のように新任教員が島の学校に赴任し鍛えられました。退任式の帰りの船は、別れのテープが流れ、涙の港風景です。

先の歌詞の続きは、

「教師よ　教師よ　太陽となって
あす築く　意思を育てよう」

となっています。教師は、「とも」と歌います。

島の学校の現状

過疎化の進んだ佐久島小学校の本年度の児童数は16名、中学校の生徒数は9名、合計25名です。昭和22年の学制施行後の数年間は、小中合わせて４００名ほどの学び舎でした。しかし、昭和50年代になると１００名を切り、複式学級での学びが余儀なくされました。

平成の時代になって、さらに児童生徒数の減少が顕著となり、今後の増加も見込めないことから、平成15年度より小規模特認校制度を導入し、島の子以外にも市内（当時は一色町内）を全校区として、どの子どもたちも通うことができるようにしました。本年度は、25名のうち、小学生が6名、中学生が6名、この制度を利用して通学しています。この本土側から通う子らの制度を通称「しおかぜ通学」と呼び、この子らを「しおかぜさん（しおかぜっ子）」と呼んでいます。

島民の願い

島の学校は、明治6年に佐久学校として創立され、以後、佐久島村立、一色町立、西尾市立と自治体の合併により冠を変えてきましたが、まもなく１５０年を迎える歴史ある学校です。島の人口は昭和22年の１６００人から、今は２２９人、世帯数１１８で、65歳以上が半数を占めています。島の子で来年度の新入生はいません。

しおかぜ通学を導入したのは、何とか島に学校を残したいという島民の思いからでした。今回も同じ思いがありました。島に学校を残す、と同時に、特色のある、島だからこその教育のできる学校を残そう。そんな願いから島民、保護者、学校が一体となって考え、結論として導き出したのが、義務教育学校としての統合です。学校がなくなることは、島がなくなることだという切実な願いがありました。

新学校設立に向け

今回設立した、新しい義務教育学校の名称を「佐久島しおさい学校」としました。これまでの小学校、中学校を廃止し、新たな学校として設立したものです。

今、全国では少子化に伴う学校統廃合により、毎年約３００校が消滅しています。この10年間で３０００校、これは全国の小中学校の約1割にあたります。この背景には「学校規模の適正化及び少子化に対応した学校教育の充実」という文部科学省の施策があります。子どもたちが集団の中で切磋琢磨して学ぶには、小学校は1学年2～3学級、中学校はその2倍くらいが望ましいとするものです。この基準通りに統廃合が進められると全国の半数の学校が消えます。

一方で文科省は、適切な規模に満たない学校でも、小規模校ならではの特色を生かした運営をして存続させればよいとも言っています。特に、学校が地域のコミュニティーの核となる機能を発揮することが重要と説いています。

佐久島の新しい義務教育学校では、これまでと同様に地域の核として、島民と一体となっての教育を更に進めていこうと考えています。島の歴史と文化を伝承し、海の環境を育て守る活動を推進する。島っ子、しおかぜっ子と島民が融合し、島おこしの活動やボランティア教育を継続していく。これらを基に、9年間の一貫校としての特色ある教育課程を編成し、魅力ある学校づくりを模索中です。

組織としての特色づくり

教育課程の編成は学校が主体となって行うものですので、教育委員会としては、相談を受けながら特色ある教育活動の推進を支援していきます。

一方、教員の配置や任命等の人事は教育委員会が主体となって行うことです。教員人事についても教育課程の編成を踏まえ、学校の意見を取り入れながら特色ある組織づくりを進めていきたいと考えました。新設の義務教育学校の教員構成

は、県教育委員会とも協議し、校長－副校長－教頭－主幹教諭－教務主任－校務主任という一本化した配置を考えました。これまでは小・中学校とも、校長、教頭、教務主任、校務主任が一名ずつ配置され、全部で8名が組織の中心でした。

今回、義務教育学校の設立にあたり、職員定数は小学校を前期課程、中学校を後期課程として、これまでと同じ人数を配置していただけます。そこで、現在の学校に見られる鍋蓋式の組織から、6名の縦系列の組織とし、残りの2名は学級担任としての配置にしました。現在の小学校の教務主任、校務主任は担任を兼務しなければなりませんでしたが、これで学級経営に専念できる者を配置できます。また、校長以下、一本の流れが確立でき、一貫校としての一つの学校であるという意識が高まるものと期待しています。

島の教育への願い

今から30年前の平成元年に刊行された「潮騒の子どもたち―島を育てる教育実践―」と題した研究出版本を紐解いています。当時名古屋大学教授の日比裕先生による監修のことばの中に、「海釣りや水泳に活発に動き回る〝島の子〟は姿をひそめ、世に誇れる素晴らしい自然環境を持ちながら、ファミコンに興じ、泳げない子が増えているのである。島に生きる子どもたちが、ただ海景色を楽しむ傍観者と根本的にさして違わない人間になってしまうとき、もはや海と深く激しいリズムの共鳴は、期待しがたくなってしまう。子どもと海の真のつながりは消えてしまう」との言があります。まとめのことばに「子どもたちが海に語りかけていくとき、島と海が子どもたちに語りかけてくるのを理解するのである。それが民話となり、佐久から奈良の都へのルートとなる。化石や土器や地層や土や桜や虫や船や古墳やもぐりの重りや蚕やごみや歯や、そして、そこに生きる人々、島と海のありとあらゆるものが子どもに語りかけてくるようになる」とあります。これらがすべて教材として開発され佐久島の教育が営まれていました。

当時、私は附属養護学校（現附属特別支援学校）に勤めていた関係から、少人数教育の指導案の在り方で講師として招かれ、この機会に一緒に勉強させていただきました。この島を訪れるたびに当時の日々がよみがえってきます。今、島っ子としおかぜっ子が同居する中にあっても、一人一人を生かし、ふるさとを愛し、たくましく生き抜く子の育成は不変です。

この著書には、教師の願いとして、

「ふるさとを愛する」とは
ふるさとへの思いである
「たくましく」とは
問題を追究する力である
「生き生きとした」とは
自ら実践する姿である

と記されています。今の教育に求められている理念と変わりません。三河教育の理念、方向性も同様と感じています。

佐久島の教育は三河の教育

新学習指導要領の理念に、「主体的・対話的で深い学び」があります。私たち三河教育に携わってきた者は、今回の学習指導要領の理念を佐久島の研究のように30年前、いやそれ以前から着実に実践し、その成果を積み上げてきました。この改訂の趣旨は、今に始まったものではないということです。今回設立した義務教育学校の9年間一貫の学びも、求めていることは同じです。

深い学びは、主体的に学ぼうとする姿と学び合う姿が融合してこそ、内容的にも時間的にも確かな学びとなって具現化されます。魅力的な教材に出会わせただけでは、また、対話的な手法を取り入れただけでは、深い学びの実現には到底至りません。それには教師自身に授業を円滑に組み立て、価値づけるファシリテーション力が求められます。それができる教師を育てなければなりません。

これまで、佐久島の学校へは人員の関係で新任教員を配置することができませんでした。しかし、今回の変更で教務主任、校務主任が担任を受け持つ必要がなくなり、再び新任教員の配置も可能となりました。若き日に島での教育を担える者は幸せです。若き教師がここで原石を磨き、三河教育の基礎を培い、力量を高め、活躍することを願うばかりです。

おわりに

「個を生かす」という教育のキーワードがあります。また、特別支援教育やへき地教育は、「教育の原点」とも言われます。私は、この「原点」と言われることが大嫌いでした。原点ということばの裏に特殊なものという響きがあります。少人数であろうと、40人学級の教育であろうと、個を見つめ個を生かし、深い学びを追究する教育手法は同じであって、障がい児やへき地の少人数教育が特殊なものではありません。

今回の義務教育学校設立は、島の学校の存続をかけた変更だけではありません。教員組織の在り方を捉え直し、本物の教師を育て、子ども一人一人を生かす教育への挑戦です。そのためにも、集団力を生かした教育が必要です。今以上のしおかぜっ子の参加と本物の教師が育ってこそ、対話的な手法も可能となり、深い学びの実現も成し得ることができます。

この佐久島の教育が海を渡り、本土の各学校へと流れ、三河教育の源流だと言われるよう取り組んでいく覚悟です。この挑戦に対して、三河各地の多くの方々からのご教授をいただきたく存じます。

佐久島という、小さな海辺の学校、潮風と波と光の学校の教育が、これぞ三河教育だと、胸を張ってお見せできる日を楽しみにしています。

随　想

時を守り　場を清め　礼を正す

三河教育研究会副会長
豊橋市立青陵中学校長
浅　井　英　雄

【聖職者】辞書には「宗教上重要な地位に就いている人間のこと。また比喩的には、教職など、一部の清廉高潔とされる職業に従事している人間を指す場合もある」とあります。かつて、「教師は聖職者」と呼ばれていた時代がありました。「教師たるもの全知全能であれ」という教えがあったからでしょうか。世の中全体が教師を聖職者と見ていたからでしょうし、教師も聖職者としての矜持をもち、そうであるよう努めていたからだとも思います。

今の時代にあって「教師は聖職者」と考える人はほとんど皆無だと思いますが、以前、お仕えしていた教頭先生からこんな話をお聞きしたことがあります。「私たちは、聖職者である必要はないが、聖職志向はもつべきだ」。はて、聖職志向とは……。自分なりに考えた末にたどりついたのが、「子どもに指導することや要求することは、教師自らが率先して実践すること」でした。

「時間や期限を守ろう」と指導するならば、教師自らが時間や期限を守るべきでしょうし、「元気よく挨拶しよう」と指導するならば、教師自らが元気よく挨拶しなくてはなりません。「すすんで掃除をしよう」と指導するならば、ごみが落ちていたらすすんで拾うべきでしょう。あたりまえのことのように思えますが、このあたりまえのことが、私自身を含めて、なかなかできていない悲しい現実があります。

「ポケットに手を入れないように」と指導すれば、子どもは従順ですから、ポケットからさっと手を出します。でも、そう指導した先生自身がポケットに手を入れていたとしたら、指導されたその子はどんな思いを抱くでしょう。「大人だから許される」「先生だけは例外」というのは、何の理由にもなりません。自分への甘えは、不信感を募らせるだけです。ささいなことのようですが、聖職を志向する日々の積み重ねが、子どもたちからの、保護者からの、そして地域の方々からの信頼を築き上げていく礎のように思います。

今回タイトルにさせていただいた「**時を守り　場を清め　礼を正す**」は、明治から平成までを生き抜いた教育学者・森信三先生の教えです。ご存じの方も多いはずです。毎年4月1日の職員に向けた「所信表明」で、この森先生の教えを引用させていただきながら、教師としての心構えを語るようにしています。時間や期限を守る。掃除を徹底し整理整頓を心がける。心をこめて挨拶をしたり返事をしたりする。どれもが、私たちが、ふだん子どもたちに指導していることがらです。まさに、聖職志向につながる教えだと思います。

教員の不祥事が後を絶たず、残念でなりません。教育委員会も学校現場も、その撲滅に向けて躍起になっています。ほとんど全ての教員が、子どもたちの健やかな成長を願って、日々真摯に教育活動に向き合っている傍らで、ほんの一握りの不届き者の仕業が、学校や教員への信頼を揺るがせているのです。「時を守り　場を清め　礼を正す」聖職志向をもち合わせていれば、わいせつ行為などの意図的な不祥事は撲滅できると私は信じています。少なくとも、教え子を悲しませるような結末には成り得ません。

いつからか定かではありませんが、校長室の壁面に「時を守り　場を清め　礼を正す」の書が飾られています。歴代校長のどなたかがしたためたものだと推測します。この書が今日も私に語りかけてきます。「おい、お前。お前こそ、時を守り、場を清め、礼を正しているか」。背筋がピンと伸びます。

三河の文化を訪ねて

第113回 －豊　田－

和紙工芸と四季桜の美が織り成す小原の里

豊田市立小原中学校長　西　﨑　修

「こうぞ打つ　三拍子こそ　さみしけれ　小原の里の　雪の夕暮れ」（藤井　達吉）

山あいに点在する農村の風景を人々は、「小原の里」とよび、暮らしている。ここには、旧小原村の時代から、和紙工芸や四季桜といった地元の人々によって受け継がれてきた有形、無形の文化が数多く点在している。他には見られない伝統的な小原の文化にふれてみようと、今も県内外から観光客が集まる。小原の里で人々の営みとともに受け継がれ、古人の思いをのせて現在、そして未来へと伝わる和紙工芸と、四季桜に代表される、小原の文化を紹介する。

うぐいすよ　なけよなけなけ
はるの日を　わがいほにはに
きなけ　どよもせ

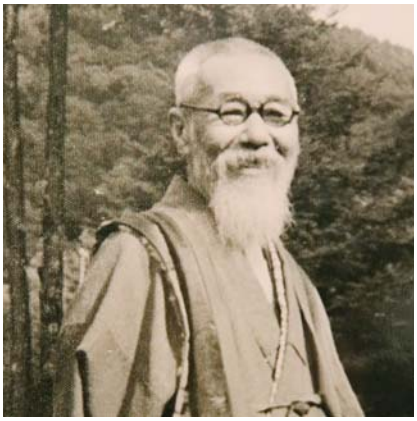
藤井達吉作　和紙漉き込み「うぐいすよ」

和紙のふるさと

小原地区は、豊田市北部に位置し、岐阜県境で土岐市、瑞浪市、恵那市と接する中山間地に広がる。平成17年度に豊田市と合併する前は西加茂郡小原村であり、今も一つの中学校、三つの小学校の学区に分かれ、人口は約３６００を数える。少子高齢化と相まって、今後は更なる過疎化が心配される地域である。

小原では、古くは室町時代から手漉き和紙が盛んに作られており、和紙の原料となる楮の育成に適した土地柄として、凧紙や番傘紙を作る良質な三河森下紙の産地として知られてきた。明治以降の生活様式の変化により、大正末期から昭和の時代にかけて和紙の需要が減少し、和紙生産は日本各地で衰退していく。小原でも紙を漉く人は次第に減少していく中、小原和紙を美術工芸として復興させたのが、現碧南市出身の藤井達吉である。

昭和の初期には、絵画・彫刻・陶芸・漆芸・七宝・紙工芸など総合的な芸術家として知られていた達吉は、図案集出版のための和紙を小原に求めたことが縁となり、昭和7年、9年、11年と3度この地を訪問する。小原和紙に芸術性を見出した達吉は、和紙を上手に漉き、製造することから色彩豊かな和紙工芸として発展させていくことの重要性を集まった村人に説く。



藤井達吉（昭和30年代）

昭和20年、太平洋戦争の戦況が悪化すると、達吉は当時住んでいた神奈川県真鶴市から疎開し、鳥屋平（現在の小原地区北大野町トヤガ平）にて窯や紙漉き場、画室、共同工房など多くの建物をつくり、芸術村の建設をめざした。達吉を慕う人々がそこに集まり、小原総合芸術研究会を発足（2年後に解散）させ、本格的な芸術村をスタートさせる。そのころから小原和紙工芸の指導と制作方法の開発に情熱を注ぎ、昭和22年には達吉の指導による作品が日展に出品され、入選する

鳥屋平図（春日井正義作）

までの水準に達するようになる。鳥屋平に集まる小原の若者たちには強い刺激となり、しだいに達吉のもとに出入りし、薫陶を受ける小原の人々も増えてくるようになった。

彼らは昭和23年に小原工芸会を創設し、時には激高する達吉の大変厳しい指導の下、和紙工芸の研究と芸術性向上に取り組み、やがては日展で入選するまでに成長し、今日の豊田小原和紙工芸の発展につながっていった。

藤井達吉の教えを直接受け継いだ安藤繁和、小川喜数、春日井正義、加納俊治（いずれも故人）、山内一生などの工芸家が、地元で創作に打ち込み活躍することで、かつて三河森下紙と呼ばれた小原和紙は、「美術工芸和紙」として芸術的領域にまで高められるようになった。

今でも和紙工芸を志す芸術家が小原に工房を構え、日展等多くの展覧会において入賞し、その名を海外にも広めている。

小原の和紙工芸については、豊田市の総合施設「和紙のふるさと」で詳しく知ることができる。その中の「和紙工芸館」では和紙の原料加工から創作の実際までを体験することができ、「展示館」では創始者の藤井達吉とその後継作家の芸術品の一部を鑑賞することができる。

小原地区の小中学校では、地元の講師を招いて総合的な学習の時間や図工・美術科などで和紙工芸について調べたり、制作に取り組んだりして、地域で受け継がれてきた小原和紙を伝統文化の一つとして学んでいる。

山内一生作　和紙工芸作品「日月文」

四季桜の里

小原の四季桜（バラ科）は、江戸時代の文化7年に現小原北町の藤本玄碩（げんせき）（文政13年没）という漢方医が名古屋方面から苗を求めて植えたのが親木となって広まったといわれている。この親木は明治34年、旧福原小学校（昭和53年に小原中部小学校へ統合）創立の際に藤本家より運動場へ移植され、見事な樹勢を誇っていたが昭和9年の室戸台風により倒木となってしまう。枯死を惜しむ人々により、その子桜から分かれた孫桜の数々が今の小原四季桜のもとになったと伝わっている。

四季桜発祥の記念碑（小原北町）

普通の桜は春に一度だけ花を咲かせるが、四季桜は1年の間に4月と10～12月の2度、花を咲かせる。秋から冬咲きの桜は珍しい品種として日本各地でも見られるが、四季桜と呼び、保護している地域は全国でもわずかである。夏以降、少しずつ咲く花は特に珍しい。小原では日露戦争後の明治39年、出征戦没者の忠魂碑建立の際に分植された前洞町の四季桜が、樹齢百年を超え、県の天然記念物に指定されるなど、今も大切に保護されている。

旧小原村では、四季桜を昭和53年に村の木に制定し、村民の手で分植を続けてきた。当時は四季桜を株分けで増やす方法しか知られていなかったために増殖は難しく、わずかに植えられているだけであった。しかし、尾張の園芸家を招いて接ぎ木等により増やすなどの試行錯誤を経て、その後行政、森林組合との連携などによる研究も進み、挿し木による植栽方法が確立し、各家庭へも配布して公共施設や山林への植栽が広がっていった。10～12月には各所で満開の四季桜を見ることができ、今では1万本を超える四季桜の木が植えられている。官民一体となって整備してきた、ふれあい公園、川見町、大洞町などの公園では、毎年四季桜

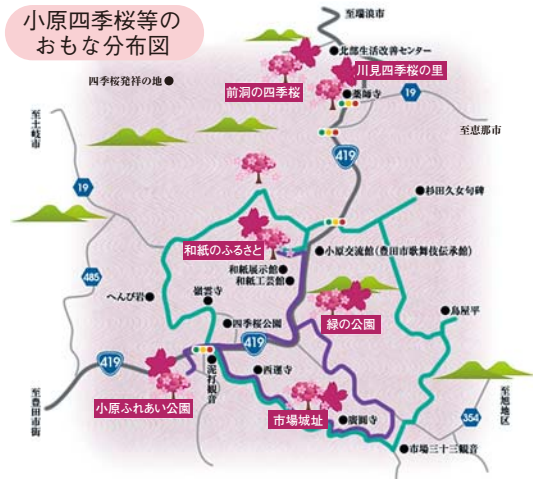
川見四季桜の里

まつりが盛大に行われ、他では味わうことができない、満開の四季桜と紅葉が織り成す景色を楽しむことができる。

小原中学校では、地区で長年受け継がれてきた四季桜の植栽を教材として取り入れ、毎年6月に地域講師の指導により、1年生で四季桜の挿し木を行い、苗木を育てる活動を続けている。大きくなった苗木は校内の育苗園に植え替え、3年生まで校内で育て、卒業時には2メートル近くに伸びた四季桜の枝を持ち帰り、自宅付近に植樹して地区の四季桜を増やす取り組みを続けている。

また、平成23年の東日本大震災の復興に取り組む岩手県陸前高田市のNPO法人「桜ライン311」に生徒会が協力して、津波到達点に桜を植え、後世に残すために、小原四季桜の苗木を毎年送る活動を続けている。

四季桜の挿し木を受け継ぐ中学生



受け継がれる文化

和紙工芸、四季桜の植栽の他にも、古くから受け継がれているものとして小原歌舞伎と俳句がある。

小原歌舞伎は、江戸時代の中ごろから地区の神社に舞台ができ、祭礼等で奉納する地芝居として始まり、娯楽が少ない農村の楽しみのひとつとして広く親しまれたといわれる。明治中期には地芝居を会得した芸達者が集まる万人講による上演が人気を集めるが、昭和30年代になると衰退し途絶えていく。しかし、昭和47年7月、未曽有の豪雨で小原が被災したことをきっかけに、小原歌舞伎復興の機運が高まり、地元の小原歌舞伎保存会の活動につながり、現在は市の指定文化財として保存継承されている。年2回の公演には、子供歌舞伎もあり、内外から多くの観客を集める。

小中学生による子供歌舞伎「奥州安達ヶ原三段目袖萩祭文（そでぎさいもん）の場」

また、小原における俳句の広がりは、大正末期から昭和初期にかけて、高浜虚子に師事し、女流俳人として活躍した杉田久女が小原に住んでいたことによる。今も杉田久女を顕彰して、毎年小中学生も応募する俳句大会を催している。

これらはいずれも、ここ小原の里に暮らす人々が長年にわたって慈しみ、労苦をいとわず受け継ぐことで、有形無形の財産として今に伝わるものである。先代の人々から現代社会を担う大人へ、そして未来を見つめる子どもたちへと受け継がれる強い意志によってはぐくまれ、激しく変貌する時流の中にあっても小原の確かなアイデンティティとして、過去から未来へと織り成す文化の美しさを伝えている。

〈資料提供・取材協力〉
・豊田市和紙のふるさと
・豊田市郷土資料館　・小原観光協会
・山内一生工房　・小原歌舞伎保存会
・豊田市歌舞伎伝承館

参加者の声

ネイチャーウォッチング

平成30年度は、親子で楽しむ自然体験活動を4回実施しました。天候の状況により中止や延期になった回もありましたが、参加された皆さんには満足していただけたようです。

川の生き物調べ（9月1日）
～水生昆虫や川魚などの生き物調査～

川遊びしながらたくさんの生物とふれあいができたから楽しかった。

雨のやみ間に少しの時間でしたが観察することができてよかったです。子どもがカニの赤ちゃんを発見し、とても喜んでいました。ヤゴなどなかなか見ることのできない虫も見ることができ、良い経験をさせてもらいました。

網の使い方、とり方を教えていただいたお陰で生き物を捕ることができました。知らないことを知ると、学びも楽しさも倍になります。夢中になる姿を見て、参加してよかったと思いました。

めざせ　虫博士（10月13日）
～木の実や樹木の観察、昆虫採集～

いろいろな虫をたくさんつかまえられて楽しかった。たくさんの虫にさわれてとてもよかった。

里山を歩きながら虫や植物を探す子どもたちの目がきらきら輝いていました。親では教えられない専門的な知識を先生方が教えてくださり、子どもたちの自然に対する興味・関心が深まったように感じました。

夏が過ぎても元気な虫がたくさんいて驚きました。虫だけでなく、いろいろなどんぐりを拾えたことも、小さい子連れにはとても嬉しかったです。虫博士ジュニアたちのお陰で、知ってはいるけど見たことのないアリジゴクやオオセンチコガネ等を見ることができ、身近なところでの大発見でした。

化石を発掘しよう（12月1日）
～貝、広葉樹の葉などの化石採集～

貝や植物の化石がとれてよかった。

化石を発見した時に、とてもうれしそうでした。楽しそうに作業をしていて、あっという間に時間が過ぎました。

過去に化石発掘を福井の方でやったのですが、採集することができませんでした。それに比べて面白いほど採集することができ、楽しい時間を親子で過ごすことができました。身近な土地に発掘できる所があるという知識も得られてよかったと思います。

星座ウォッチング（1月26日）
～オリオン座・すばるなどの天体観察～

もともと星には興味があったけど、もっと興味が持てました。講師の先生の説明も分かりやすかったです。

宇宙の星がたくさんあって、見られてよかったです。ネイチャーウォッチングは楽しい！

自分でレンズを操作して天体観測をしていいよというのは初めてだったので、すごく喜んでいました。体験と説明・解説のバランスがすばらしいと改めて思いました。

来年度は、全6回。回数を増やして実施します。
詳しくは、4月配付のチラシをご覧ください。

教室の窓辺

わくわく

幸田町立深溝小学校
伊藤　健太郎

「よっしゃー！終わったー！」

子どもたちの下校を見送った後、同僚の先生と顔を見合わせ、にっこり言葉を交わす金曜日。

初めて特別支援学級（わかば学級）の担任になった4月。「やれるのか？」と不安な気持ちでいっぱいな自分がいました。とにかく「やるしかない！」と心に決めてチャレンジ。大切にしようと決めたのは、子どもたちと一緒に教師も楽しさを感じ、夢中になること。

とは言っても、現実は簡単ではありません。朝から「学校嫌だ。お家に帰る！」と泣き暴れ、学校から逃げ出そうとする子。苦手なことがあると体調不良を訴え、登校を渋る子。協力学級での授業に不安を感じ、気持ちが高ぶって大泣きする子。自分の世界にどっぷり浸かって、そこから抜け出せない子…。そんな子どもたちとの毎日は、なかなか大変です。つい、子どもをコントロールしようとしていらいら…。放課後はいつも、自己嫌悪と心の中での反省会でした。

そんなある日、わかば学級で豊橋総合動植物公園へ校外学習に出かけました。驚いたのは、元気・やる気100％の子どもたちの姿です。友達と一緒に笑顔いっぱいで遊園地を駆け回る子。教師の手を引いて、次のアトラクションをめざして歩き出す子。上級生として下級生をお世話する子。昼食のレストランで、堂々と注文する子。どの姿も積極的で、「自分から」がいっぱいでした。

そんなわかば学級の子どもたちの姿を見て「毎日が遊園地のように楽しめる、わくわくがいっぱいつまった学校にしたいな」と思いました。分かる楽しさ、できる楽しさ、挑戦する楽しさ、仲間と一緒に頑張る楽しさ、そして、成長する楽しさ…。いろんな楽しさを味わえて、わくわくしながら登校できる学校。考えただけで、私もわくわくしてきます。

「また、みんなで遠足に行きたいね。」と、普段は登校を渋る6年生が優しい笑顔でつぶやきました。それを聞いて胸がジーンと熱くなります。うれしいなあ。

今、結構大変な毎日ですが、嫌いではありません。多くの先生方や保護者、地域の力を借りながら、わくわくがいっぱいのわかば学級を、子どもたちと一緒に創っていきます。まだまだやれることはたくさんあります。さあ、今日もファイト！。

つくる、見るって楽しい！

蒲郡市立大塚中学校
横田　美津子

「すごい！そっくりだ。」

美術の授業で3年生がつくった展示作品に1、2年生の生徒が集まっている。またこの時期がやってきた。文化祭の作品展示だ。3年生の作品は、必ず後輩たちにも鑑賞をしてもらって、市の作品展に出すための投票を行い、出品するグループを決めている。

3年生美術の題材『食べ物そっくり王選手権』は、各4人でテーマを決めてグループ制作をしている。

あるグループがこんなテーマを掲げてアイデアを考えた。

『○○先生に食べさせたい』

寿司をメインにした定食で、三色団子がデザートでついている。担任の好きな物を集めた、何ともうらやましい作品に仕上げようというものだ。

制作が始まり、まぐろの寿司をつくっていた生徒は、まぐろの筋をどうやって表現したらよいか悩んでいた。ある日、白の縫い糸を持ってきて、赤を練り込んだ粘土にていねいに斜めに糸を埋め込んだことで、リアルなまぐろになった。また、吸い物を作っていた生徒は、透明な液体をどう表現しようか迷い、水糊を使って具を浮かべることを思いついた。

生徒の発想にはいつも驚かされる。

「これを表現するにはどうしたらよいか。」と相談されたとき、まずは、生徒と一緒に考えてみる。失敗が予想されても時間があれば、「まずはやってみよう。」と促してみる。

水糊を使った吸い物は、時間が経つと水が蒸発してしまって、表面がカピカピに乾いてしまった。

「こんなふうになっちゃうんだね。」

「蒸発しない透明な液体ってないのかな。」やってみてわかることがある。そしてまた考える。この試行錯誤が楽しく、できたときの達成感は大きい。

相談の結果、水糊の代わりは、油がいいのではないかという考えに至り、グリセリンに具を浮かべることで解決した。

文化祭の作品展示で、地域の方や先生たち、生徒たちが鑑賞をする。○○先生も自分がテーマになった作品を鑑賞しながら、うれしそうに生徒たちと談笑していた。

つくること、見ること、どちらも楽しい。これからも、美術の授業を通して、ただひたすらそのことを伝え続けたい。

平成30年度

みかわ彩発見（さい）絵画コンクール

「みかわ彩発見絵画コンクール」は、本法人の新規事業です。春夏の部１７３２点、秋冬の部８０５点の応募がありました。応募してくださった皆さんにお礼申し上げます。

かきぞめコンクールと同日に作品展と表彰式を開催しました。最優秀賞、優秀賞の受賞者を紹介します。これらの作品の一部は、２０１９年度版『夏、冬休み日誌』の表紙絵等として掲載させていただきます。

佳作を含めた入賞者一覧は、ホームページをご覧ください。

表彰式記念撮影（上：春・夏　下：秋・冬）

最優秀賞入賞者及び作品（春・夏の部）

岡崎駒立ぶどう狩り

岡崎・本宿小学校
１年　森 山　絆 夏

ババババババババ，ババーン！
大はくりょくの岡崎の花火大会

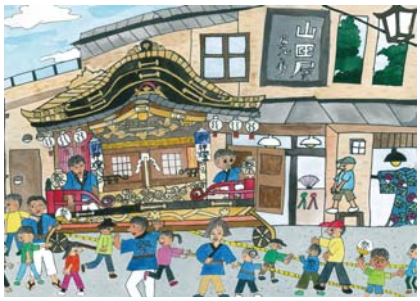
愛教大・附属岡崎小学校
２年　貝 沼　姫 和

みんなで「ながしそうめん」

田原・童浦小学校
３年　藤 城　　夏

石巻神社　春の大祭

豊橋・石巻小学校
４年　小 林　優 花



神明宮のお祭り

愛教大・附属岡崎小学校
５年　市 川　侑 誠

輝け世界へ　大提灯

西尾・一色南部小学校
６年　湯 浅　心 媛

優秀賞入賞者（春・夏の部）

1年	2年	3年	4年	5年	6年
愛教大・附属岡崎小 菅野　　直	西尾・西尾小 金原　綾音	刈谷・亀城小 野澤　佳成	愛教大・附属岡崎小 半田　祐樹	西尾・津平小 齋藤　晃大	碧南・新川小 石川虎多朗
岡崎・六ツ美北部小 五島　來夢	豊橋・豊小 大河原羽南	豊橋・東田小 大山　結加	豊橋・大清水小 寺田有美香	みよし・黒笹小 竹中　大翔	西尾・一色南部小 髙須　柑夏

講評

三河教育研究会造形部会長
岡崎市立六ツ美北部小学校長　杉原惠美子

三河の子どもたちが、初めて開催されるこのコンクールに絵を出品しようと、「くらし」「まつり」「ふるさと」というテーマから自分の描きたいものを選んで表現しました。春・夏の部、秋・冬の部合わせて2537点もの応募がありました。

審査は、絵の魅力に引き込まれる時間となりました。心に響く色・形・光。聞こえてくる友達の声や花火の音、祭りのざわめき。書き初めの墨の匂い、お餅の柔らかな舌触りや雪を握る冷たい感触…。子どもたちが、目・耳・鼻・口・手を働かせ、素直に丁寧に描いた作品からは、家族との絆や地域の温かさが伝わってきます。

予想をはるかに超えた子どもたちの挑戦に、私自身、「絵を描く意味」を再(彩)発見することができました。

最優秀賞入賞者及び作品（秋・冬の部）

おぞうにを　たべたよ
設楽・名倉小学校
1年　塚田　そら

しんけんしょうぶ
岡崎・矢作南小学校
2年　白井　麻央

岡崎南公園雪あそび
岡崎・羽根小学校
3年　水野　友葵

書き初め
岡崎・根石小学校
4年　稲垣　結

ぼくの大好きな榊鬼
設楽・清嶺小学校
5年　河辺　汐音

絵を描いていて幸せな私
幸田・中央小学校
6年　宮城　うたの

優秀賞入賞者（秋・冬の部）

1年	2年	3年	4年	5年	6年
安城・里町小 菅澤　瑠菜	愛教大・附属岡崎小 貝沼　姫和	刈谷・小高原小 川岸　姫依	豊田・前山小 山﨑　愛美	愛教大・附属岡崎小 市川　侑誠	岡崎・大樹寺小 矢野　希実
豊根・豊根小 塚本　悠輝	岡崎・根石小 祖式　真帆	豊橋・東田小 大山　結加	安城・桜林小 小西　真央	岡崎・六ツ美北部小 佐々木美帆	安城・桜井小 斉藤　凜

平成30年度 かきぞめコンクール

本法人が刊行している「かきぞめ手本」を題材にして、第8回かきぞめコンクールを行いました。三河地区から、小学生2547点、中学生393点、計2940点の作品が寄せられました。

書家・編集委員の先生方によって慎重に審査され、最優秀賞9点、優秀賞18点、佳作63点、入選180点が選ばれました。一覧はホームページにも掲載しました。

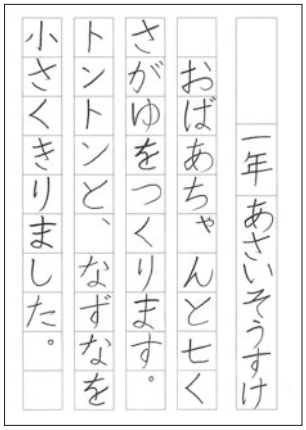
三河教育会館で2月2日(土)に入賞作品展、3日(日)に表彰式を開催しました。

表彰式記念撮影

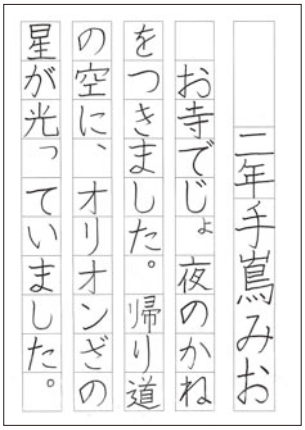
最優秀作品の紹介

本年度のかきぞめコンクールで、最優秀賞を受賞された9名のみなさんの作品を紹介します。

〔小学生の部〕



西尾・一色南部小学校
一年　浅井聡介



豊田・駒場小学校
二年　手嶌美緒

〔中学生の部〕

豊田・朝日小学校
三年　朝倉永理

安城・里町小学校
四年　米津基

安城・安城北部小学校
五年　市川桜子

豊田・元城小学校
六年　椎葉芽生

豊田・前林中学校
一年　石川諒一

安城・東山中学校
二年　米津和

豊田・崇化館中学校
三年　稲垣美紅

講　評

「かきぞめ手本」編集委員長
豊田市立追分小学校長　柴田みどり

かきぞめコンクールに出された作品からは、書き手の真剣さや緊張感やその子らしさが感じられました。すばらしい作品が多く、優劣をつけることは難しかったです。

1、2年生の硬筆は、止めやはらいなどの字の書き終わりまで意識し、鉛筆のよさを生かして力強く、濃くしっかり書けた作品が目を引きました。3年生以上の毛筆では、左右のバランスや平仮名の筆の回し、行書の運筆のつながりを意識して書かれた作品に感心しました。名前も作品の一部として形よく丁寧に書かれていました。

この1枚にたどり着くまでに、自分と向き合い、何度も何度も練習したことが、自分自身を高めたことでしょう。結果だけでなく努力する過程を楽しみ、これからも作品を作り続けていくことを願っております。

平成30年度かきぞめコンクール入賞者（最優秀賞・優秀賞・佳作）一覧

	小1年	小2年	小3年	小4年	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
最優秀賞	西尾・一色南部小 浅井　聡介	豊田・駒場小 手嶌　美緒	豊田・朝日小 朝倉　永理	安城・里町小 米津　　基	安城・安城北部小 市川　桜子	豊田・元城小 椎葉　芽生	豊田・前林中 石川　諒一	安城・東山中 米津　　和	豊田・崇化館中 稲垣　美紅
優秀賞	安城・桜井小 伊藤　絵天	豊田・野見小 村瀬　朱音	岡崎・竜美丘小 星野　橙子	豊田・梅坪小 小野　　爽	豊田・野見小 村瀬　七海	豊田・市木小 小松　起子	安城・東山中 神谷　久輝	碧南・西端中 岡村　菜優	豊田・朝日丘中 岸　　馨子
	西尾・鶴城小 論田　悠里	豊田・駒場小 山田　　晴	安城・安城北部小 坂口　蒼依	幸田・豊坂小 山﨑　ねね	豊田・岩倉小 川上　優空	西尾・一色西部小 長田　昇大	安城・東山中 中原　愛彩	安城・東山中 天野　　凪	豊田・浄水中 本田　京楓
佳　作	岡崎・井田小 田形　琉人	豊田・朝日小 勝本　真帆	豊田・朝日小 月山　心瞳	岡崎・井田小 長友　栞南	刈谷・双葉小 小野　慎平	碧南・新川小 都築　由愛	豊田・豊南中 宮崎　泰成	碧南・西端中 江坂　天那	岡崎・東海中 鈴木　もも
	豊田・寺部小 川澄　莉子	豊田・東山小 大嶋　千悠	豊田・市木小 村瀬　敦哉	刈谷・富士松南小 高田　小綸	豊田・青木小 篠原菜々子	碧南・西端小 前多衣良華	豊田・高岡中 有上　麻菜	豊田・崇化館中 龍瀬　真鈴	豊田・豊南中 宮崎　塔子
	豊田・寺部小 柴田　栞歩	豊田・竹村小 安藤　　芹	豊田・山之手小 窪田　優恵	豊田・浄水小 室節　千遥	豊田・梅坪小 田中　那樹	豊田・朝日小 菊地　廉旺	豊田・美里中 内田　晴菜	豊田・上郷中 馬場真衣子	豊田・高橋中 光本　羽那
	豊田・市木小 村瀬　愛佳	豊田・土橋小 鈴木　寛菜	豊田・高嶺小 荒牧　皇輝	安城・里町小 早瀬ひより	豊田・高嶺小 岡戸　柚衣	豊田・朝日小 田栗織理絵	安城・明祥中 井上　新永	安城・東山中 市川雄一朗	豊田・逢妻中 鈴木　美空
	豊田・山之手小 窪田　真優	豊田・大林小 渡辺　翔真	豊田・高嶺小 谷澤　空奈	安城・桜町小 加藤　優奈	豊田・若林東小 大口　乃愛	豊田・堤小 沼﨑　千昂	安城・東山中 神谷　麻輝	西尾・福地中 山﨑　春奈	西尾・一色中 都築　真央
	豊田・高嶺小 八重尾果乃子	西尾・矢田小 丸林　悠華	安城・三河安城小 小島　縁和	西尾・一色中部小 大饗ゆりか	豊田・駒場小 山田　　柊	西尾・一色南部小 湯浅　心媛	安城・東山中 高木　裕美	西尾・一色中 後藤　百香	西尾・吉良中 黒野　梨心
	蒲郡・西浦小 太田　捺希	幸田・中央小 石原　未悠	西尾・一色中部小 中津　遼太	幸田・深溝小 小野良有芽	蒲郡・西浦小 小田百萌花	蒲郡・蒲郡南部小 伊藤　緋色	西尾・西尾中 青山さくら	幸田・北部中 浦山　美妃	みよし・三好中 安藤なつみ

平成30年度「個人研究助成」～審査を終えて～

本法人では、教育振興の目的を達成するため、個人研究助成を行っています。この度、平成27年度を研究1年次として、平成29年度の3年次まで、着実に研究を推進された10名の先生方の論文の最終審査を行いました。その結果、下記の3名の先生方の論文が特に優秀として選ばれました。審査に当られた水藤彰啓審査委員長の講評の概要とともに紹介いたします。

講評

多忙な日々の中で、このような素晴らしい論文を作成、提出されたことに敬意を表します。多くの論文から先生方が専門性を日々高めておられることがわかり、その継続的で地道な努力が、教育力や授業力を高めていることに確信がもてました。人事異動があったり学年配置がかわったりして、研究主題に若干の変更を余儀なくされた論文もありましたが、強い信念のもと、子どもを中心に据えて研究に取り組まれた姿からは、子どもたちの確かな成長を読み取ることができました。

今回は技術家庭科や学校保健、総合的な学習の研究領域からの応募もありました。子どもたちの実態に根差したすばらしい手だてや地元愛に溢れた温かみのある実践は、三河各地の先生方にもぜひ参考にしていただきたい内容であると思いました。また、教科の学習の向上と子どもたちの生活の向上（例えば家族におけるコミュニケーション、防災意識等）の関連が意識されているものもありました。今年度はとりわけレベルの高い優秀な論文が多く、審査は困難を極めました。

課題として、次の点が指摘されました。

・継続研究ではあるが、1年ごとにフレッシュな気持ちで研究に取り組めるよう工夫する
・検証の段階での子どもの具体的な姿を明確にしておく
・手だてに独自性・独創性が感じられるものが多かったが、「めざす子どもの姿」「仮説」「手だて」にずれが生じないようにする
・1・2年次と3年次の取り組みと成果を整理し、字数のバランスを考えて記述する
・手だてであるはずの「かかわりあい」が目的にならないようにする
・最終的にできあがった論文を再度推敲する。例えば、目次と実際のページ数が異なっていたり、誤字があったりすると、それだけで信頼感をなくしてしまう
・対話記録の資料が縮小され過ぎて、読み取れないものがある。ほどよい大きさでの資料の掲載をする

以上、今後の参考にしていただければ幸いです。

◇3年次個人研究審査結果◇

最優秀賞

豊橋市立高豊中学校
杉山　貴哉

友達と学び合いながら、主体的によりよい英語表現を追究する生徒の育成
～中学2年　英語科「Cool Toyohashi! 地域のよさを海外の人に伝えよう」の実践を通して～　〔外国語〕

優秀賞

豊田市立小原中部小学校
尾﨑　崇洋

主体的に行動できる子どもの育成
～地域のひと・もの・ことの出会いを大切にする活動の実践（第4・6学年）を通して～　〔総合的な学習〕

優秀賞

蒲郡市立塩津小学校
小林健太郎

豊かなかかわりを通して、「わかる」「できる」喜びを味わう子
～4年「タグラグビー」6年「キャッチバレーボール」「表現運動」の体育科の実践を通して～　〔体育〕

平成30年度 教育図書出版助成

本法人では、教育図書の出版に対して助成を行うとともに、その内容についてお知らせし、教育の振興を図っています。応募対象は、三河の小・中学校教員及び教員であった個人、または、これらの方々を代表者とするグループ、学校教育、教育関係団体や保護者に関わる教育図書で、経費の多くを公費等の援助を受けずに出版したものです。

今年度も、審査会を開き、助成をさせていただきました。なお、2019年度の応募要項は、愛知教育文化振興会のホームページに掲載されます。

○**「長篠・設楽原の戦い」鉄炮玉の謎を解く**
著者　元新城市教育長　小林　芳春
A5判　214頁　2000円

教科書（社会）に「鉄砲の戦い」の文字がでてきますが、戦国時代の鉄砲（火縄銃）は残っていません。ですが、当時の鉄砲の玉は何発か発見されています。その玉を調べ、歴史の謎に迫ろうとした記録です。

小さな事実の中身や背景を語る1冊。

特色ある教育活動
―「郡市教育・研究助成」を活かした取り組み紹介―

豊かな道徳性を育み、よりよく生きようとする子の育成
～問題解決的な学習を中心とした道徳科授業を通して～

碧南市立中央小学校　石原　博文

碧南市では、教員の力量向上を目的とし、市内12の小中学校が協力して研究に取り組み、その成果を共有できるようにしています。特に、授業力をつけるために、3年計画での研究発表を順に担当しています。

本校は、新教科である道徳科の授業に焦点を当て、昨年7月に研究発表を行いました。従来型の心情理解に偏ったものから脱却し、質的変換を目指しました。理論部分は、岐阜大学大学院準教授の柳沼良太先生にお願いしました。問題解決的な道徳科の授業に挑戦し、授業実践を重ねてきました。元三教研道徳部会長の近藤正義先生にも指導を仰ぎながら、授業に自信をもって臨めるようになりました。

基本的な指導過程は次の通りです。

導入では、内容項目にかかわる学習前の実態の表出をねらいとして、子どもの具体的な経験や事例を問います。

展開前段では、資料を用いて、個々がもつ道徳的価値観の表出をねらいます。資料の中で①何が問題か②なぜ問題か③何を解決するべきかを全体で共通理解します。その後、個人で解決策をじっくり考えます。

展開後段では、子どもが新たな価値観を獲得することをねらいます。前段で考えた解決策を学級全体で話し合います。役割演技を行ったり、同じような場面で同様の解決策が有効であるか確かめたりします。ときにはスキルトレーニングの時間とすることもあります。

終末では、自己の変容の自覚をさせ、実践意欲の向上をねらいます。振り返りをする時間を確保し、感想交流を行います。

板書の形式についても工夫してきました。1時間の授業の流れを特定の場所に書くことで、子ども自身が変容を自覚しやすいようになったと思います。

最後に1年生のあるクラスの合言葉を紹介します。

どうとくは、こころとあたまでかんがえて、おくちではっぴょう。

しんけんなかんがえにまちがいはないよ。

授業を楽しんでいる姿が、この合言葉からも目に浮かんできます。

この研究で得られた成果や課題を各校で共有しながら、さらに研究実践を積み重ねていきたいと考えています。

算数・数学の楽しさを子どもたちに実感させたい
「数楽チャレンジ大会」
～小・中・高・大の連携を生かして～

新城市立舟着小学校長　伊藤　智明

新城市では、やる気を育てるアクティブ事業として「数楽チャレンジ大会」を行っています。小学校高学年から中学生を対象に、授業とは違った算数・数学の問題に挑戦することを通して、子どものやる気を促すことがねらいです。小中学校・高校・大学の先生と市教委担当の16名で実行委員会を組織しています。

本年度は12月8日㈯に新城東高校を会場として、第21回大会を実施したところ、小学生47名、中学生58名の計105名が参加しました。参加者は、午前9時半から最大午後2時20分まで「問題を解く」ことと「体験コーナー」の両方に取り組みました。

黙々と問題解決に取り組む場

今回は小学生問題1問、小中共通問題5問、中学生問題1問の計7問を出題しました。内容は、両替問題、覆面算、ぶどう算、鏡の再起反射、飯田線のダイヤグラム等、場合の数の基本問題やパズル的な問題、実生活に関わる問題です。私たちが目指している「考えることが楽しい問題」や「何か新しい発見がある問題」に近づくことができたかどうか、解答用紙に書かれた子どもたちの考え方を把握しながら評価していきたいと思います。

数学的な体験活動を楽しむ場

愛知教育大学の小谷先生のご協力により、体験コーナーの企画・運営をゼミ生が行っています。今回は『ストロー正多面体』『ドーンと世界一周～正確に測ろう～』『15パズルで遊ぼう』等のスピードや正確さを競ったり、立体模型を作ったりする活動でした。夢中になって取り組む子どもたちの真剣な表情や笑顔がたくさん見られ、初対面同士でも会話を弾ませている子どももいました。

子どもたちの声を励みとして

帰る子どもたちから「すごく楽しかった」という言葉を聞くことが何よりの喜びです。「難しかった」という感想を聞くこともあります。こうした率直な感想を励みや反省点としながら、問題づくりを工夫し、参加者の意欲を引き出す大会にしていきたいと考えています。

学校教育ボランティアグループ活動紹介

おじいちゃん、おばあちゃんありがとう

岡崎市立福岡小学校　ふくふくタイム

本校は岡崎市の南部に位置し、開校145年を迎える歴史ある学校です。地域の皆さんは、歴史を大切にするとともに、学校の活動にも非常に熱心で協力的です。

「ふくふくタイム」は、福岡小学校のスクールサポートボランティア活動の一つです。平成17年に活動を開始しました。メンバーは、学区の老人クラブ福寿会を中心に福祉委員と有志の皆さんで構成されています。活動を始めたきっかけは、1年生の下校の安全を確保するために、1、2年生を一緒に下校させたいという当時の校長の要請でした。活動は1年生の授業がない金曜日の5時間目に行います。こま回し、指編み、折り紙、体操、ボール遊び、グランドゴルフの6つの遊びを教えます。子どもたちは6グループに分かれ、順番に6種目を体験します。それぞれの種目では1年生が飽きないように教え方を工夫し、講師も一緒に遊ぶことを楽しんでいます。こま回しでは「ガチンコ勝負」を取り入れたところ、うまくできる子もできない子も真剣にこまを回すようになりました。講師も参加し、一体感を味わうことができました。折り紙では、季節に合わせたものを折ることで、子どもたちが教室や家で飾って楽しむことができました。

1年生は「おじいちゃん、おばあちゃんが優しく教えてくれる」「できるようになると楽しい」とこの時間を楽しみにしています。メンバーからは「子どもたちから元気をもらえる」「地域の安全・安心に貢献できる」という声が聞かれます。小学校生活の最初の1年間に継続的にお年寄りとふれあう機会があることは子どもたちにとってもお年寄りにとっても良いことです。1年生の時にお年寄りとふれあう機会がしっかりとあるので、上学年になってもお年寄りや地域の方と交流が積極的にできます。1年生の時のふれあいがいかに有効であったかが分かります。福岡小の教育の特色の一つとしてこれからも大切にしていきたいと思います。

（岡崎市立福岡小学校　吉川久美子）

行事予定（3月～6月）

- 3月1日㈮
  「教育と文化」119号発行
- 4月19日㈮
  第1回文振郡市正副代表者会
- 4月24日㈬
  第1回文振郡市事務担当者会
- 4月26日㈮
  個人研究助成（2年次・3年次）
  申請書提出締切
- 5月9日㈭
  監査会
- 5月13日㈪～16日㈭
  第Ⅱ期刊行物注文
- 5月14日㈫
  第1回理事会
- 5月24日㈮
  団体研究助成申請書提出締切
  学校教育ボランティアグループ助成
  申請書提出締切
- 5月31日㈮
  第1回評議員会・臨時理事会
- 6月3日㈪
  文振新任式
- 6月12日㈬
  第1回編集委員長会
- 6月13日㈭
  出版・印刷各社との打合せ会
- 6月14日㈮
  個人研究助成（1年次）申請書
  提出締切
- 7月1日㈪
  「教育と文化」120号発行

編集後記

◇枯れ野の絨毯（じゅうたん）がいつの間にか緑に変わりました。季節は確実に巡り、平成も終わりを告げようとしています。本号に玉稿を賜りました皆さんに感謝申し上げます。今号は、新規事業の絵画コンクール、自然体験活動「ネイチャーウォッチング」を加えて構成しました。

◇巻頭の原田様からは、ランドセルに何を詰めて帰しているかを考えることで、学校の役割が見えてくる、とご示唆いただきました。どんなことを、どれくらいランドセルに詰められるでしょうか。

◇提言では、尾崎様より、佐久島に誕生する新しい義務教育学校について、行政面からどのような支援をしていくか述べていただきました。新制度の導入に寄せる熱い想いが伝わってきます。

◇浅井様からは、「聖職者志向」の必要性について投げかけがありました。学校と言えば、知識の伝授を考えがちですが、子どもの人となりを捉え、習慣形成を図ることを考えると、教師のふるまいの一つ一つが、いかに大切であるかがわかります。

◇「三河の文化を訪ねて」は、これまでの「人物伝」にとらわれず、今回のように地域の行事や有形・無形文化財にも目を向けていく予定です。読者の皆さんが、訪ねてみたい、参加してみたいと思うような身近な情報が提供できる紙面づくりに努めてまいります。

このコーナーを冊子にまとめた『三河人物散歩三』を頒布しています。詳しくは、ホームページをご参照ください。（総務部）